巻頭言

今こそ、私たちの立正安国論を語る時

現代宗教研究所所長　三原正資

二〇一一年三月一一日に発生した東日本大震災と、それによって起こった東京電力福島第一原子力発電所のレベル7と評価されるに至った過酷事故の進行を注視していたとき、私の脳裏によみがえったものは、かつて、一九六〇年代に日本各地に発生した「公害」という悪夢である。昭和時代の終る一九八〇年代のバブルに日本中が我を忘れて酔っていたとき、この悪夢は別の装いをまといながら、私たちを襲う準備をしていたのである。

愚かというほかない。私たちの国は崩壊した福島第一原発の四基の原子炉の後始末に一世代以上もわずらわされるだろう。そのうえ、放射性廃棄物の最終処分の方法については全く見通しがたっていない。それが、日本各地に一七ヶ所、五四基もある。

この危険な事態のなかで、宗門運動の目標として安穏な世界の実現をめざす私たち日蓮宗教師はどうすればよいのだろう。

『現代宗教研究』第六号（一九七三年三月）をひもとくと、

日蓮聖人の教えと公害問題

〈話し手〉茂田井教亨〈聞き手〉石川康明、内山堯邦

という興味深い一篇があった。

昭和四七年（一九七二）八月二七日に茂田井教亨現宗研顧問（立正大学教授・仏教学部長）の話をうかがって、第五回中央教化研究会議の教義的資料としてまとめられたものだった。当時の公害を今日の原子力災害に置きかえると、先生のお考えは、今なお、私たちにとって有益な教示であると思われる。

いうまでもなく、公害という問題はきわめて現代の二十世紀の問題であって、しかも高度に科学的成長をとげた世界の文化的状況の中で、政治的、経済的条件がからみあって起きている問題であって、十三世紀の初頭にお出になった宗祖の文献の中に今の問題をとくカギまたは指示を与えていただくというのは少し無理かもしれませんね。誇張していえば、木によって魚を求めるということになるかもしれません。

しかし、宗祖がほんとうの宗教者としてあの時代に対応されたという、宗祖の時代対応、歴史対応の精神をほんとうにつかみ、宗祖の軌跡をふんでいけるとすれば、全然できないということはない。

ここには一三世紀の宗教と現代の知性とのほどよい距離のとり方が示されている。このあと、先生は宗祖の基本的姿勢を支える教義について述べられるのだが、私が注目したいのは、次の一節である。

まず、こういう問題をわれわれが考える場合、そのグルンドになるもの、立正安国論をお書きになったということ、安国論そのものでなく、安国論をお書きになったという基本的姿勢が、我々の中に再認識されなければいけないんではないかと思う。

ここで、先生が強調される「安国論そのものでなく、安国論をお書きになったという基本的姿勢」とは何か。おそらく、次の一節がそれにあたるのではなかろうか。

何としても安国論の冒頭にありますように、多くの人が災害で死んでゆく、それこそ屍が山をなすといったあの現状を目撃された聖人が、どうにも黙っていられなくなって立ち上られたという事実、これが大事なのですね。

つぎに先生は『諫暁八幡抄』の「同一苦」の論理について、まず、

御真蹟は……「涅槃経に曰く一切衆生の異の苦を受くるは如来一人の苦なり云々」とお引きになられて、「日蓮曰く一切衆生の同一の苦は悉くこれ日蓮一人の苦なりと申すべし」となっております。（定一八四七）

と述べ、ついでご真蹟で「異」が消され「同一」と書かれたことを考証され、「異」と「同一」のちがいの意味を指摘し、「同一苦」の教学的意味を確認したあと、公害という現実的課題にとりくむ方途を示唆される。

さて、敗戦後の日本は平和国家を志向しながら、実際には核兵器を許容し、原子力発電所を建設して繁栄を享受してきた。しかし、その結果、今日、人びとは一同に未曽有の危機を体験している。この事実をよくわきまえて「同一の苦は悉くこれ日蓮一人の苦」と示されたことを私たちは深く考えなければならない。はたして「同一の苦」の原因は何だろうか。私たちが考えなければならないことは多い。

私はこの度の未曽有の災害を体験し、目撃した多くの教師の中から「どうにも黙っていられなくなって立ち上」る方々が、必ずあらわれ、そのような方々によって、これから現代の立正安国論が語られるだろうと信じている。